

◆ごあいさつ

●全国大学音楽教育学会 理事長 木 許 隆

会員の皆さま、お元気でいらっしゃいますか。

2020年度の第36回全国大会《奈良大会》は、新型コロナウイルス感染症の拡大により延期されましたが、本日、このような新しい形で大会を開催することができ、大変嬉しく思っております。

目に見えないウイルスが世界中に蔓延し、身体の調子が悪くなることは、恐怖を感じるだけでなく、身体も心も疲労させるものでした。また、マスクの着用、消毒液の携行は、自分自身を守るアイテムとして定着しましたが、まだまだ慣れたものにはなっていません。このような状況が続く中、様々な事柄が新しい形への変化を求められる1年を過ごしました。

「変化すること」は、様々なリスクを伴ったり、摩擦が起こったりするものです。しかし、本学会には、この時代に合ったものをつくろうとする柔軟な考え方や姿勢があると思います。これは、2020年度の理事会や臨時理事会の運営でも感じさせていただきました。

本大会のテーマ「これからの音楽教育のゆくえ」もまた、新しい時代を考えるきっかけになるのではないかと思います。本日は、短い時間になりますが、梶田叡一先生の基調講演や全国各地からの研究発表を拝聴し、学びを深めていただければと思います。

最後になりましたが、この全国大会を開催するにあたり、ご尽力いただきました山岸実行委員長、永井事務局長をはじめ関西地区学会実行委員の皆さまには、感謝申し上げます。そして、会員の皆さまには、昨年、研究の場を提供することができなかったこと、学会運営に関する不安を抱かせてしまったことに対し、深くお詫び申し上げます。

◆第36回 全国大会開催にあたって

●全国大学音楽教育学会 第36回全国大会実行委員長 山岸 徹

本日、「これからの音楽教育のゆくえ」を大会テーマとして、第36回全国大会をオンライン方式で開催させていただきますが、開催にあたりましては、木許 隆 理事長をはじめ、全国の会員の皆様、そしてその他多くの方々にお力添えいただき、ようやく本日を迎えることができました。

皆様に厚く御礼申し上げます。

本日は、会員の皆様より15件の研究発表（口頭発表）のお申し出をいただきました。また、基調講演としまして、梶田叡一先生に「令和の時代の音楽教育」と題してご講演いただきます。

初めてのオンライン方式での開催となり、行き届かない点も多いかと存じますが、大会実行委員、大会運営スタッフとも、全力で準備に取り組んでまいりました。本日の全国大会が、参加していただいた皆様にとって貴重な機会となることを心から願いながらご挨拶とさせていただきます。

どうぞよろしくお願ひ申し上げます。

第36回全国大会は本来2020年に《奈良大会》として開催する予定でしたが、新型コロナウイルス感染拡大のため本日に延期となりました。実行委員会としましては、3年前より《奈良大会》開催に向けて準備を進めてまいりました。会場として予定していました奈良春日野国際フォーラム 豊にも何度か打ち合わせに伺いましたが、先方のスタッフの皆様はこちらからの様々な要望に丁寧に対応してくださいました。

また、奈良での開催ということで以下のような企画も準備させていただいていました。お願いしておりました先生方、関係の皆様のご快諾もいただいておりますが、実現しなかったことは大変残念です。

皆様への感謝の気持ち込め、ここに掲載させていただきます。

*以下の企画は、オンライン方式の開催となったため誠に残念ながら中止することになりました。

1) 特別講演（ワークショップ形式）：「ポリフォニーで鍛える合唱指導」

講師：寺尾 正 氏（本学会関西地区学会会員、大阪教育大学名誉教授）

モデル演奏：アンサンブル・ダッフォディルの皆様

2) パネルディスカッション：「これからの音楽教育のゆくえ」

パネリスト：奥 忍 氏（元奈良教育大学、和歌山大学、岡山大学、兵庫教育大学連合大学院教授）

今川 公平 氏（学校法人今川学園 木の実幼稚園園長）

3) 雅楽演奏：舞楽「蘭陵王」 演奏：南都楽所（奈良・春日大社）の皆様

◆日 程 *すべて Zoom ミーティングによるオンライン方式

●令和3年8月27日(金)

《第1会場》

- ・10:20~10:30 開会の挨拶：全国大学音楽教育学会 理事長 木許 隆
- ・10:30~12:00 基調講演：「令和時代の音楽教育」 講師：梶田 叡一 氏
- ・12:20~12:40 総会
- ・12:40~12:45 次回全国大会のご案内：
全国大学音楽教育学会 中・四国地区学会会長 梶間 奈保

* * * * *

(12:45~14:00 昼休み)

* * * * *

《第2会場、第3会場、第4会場》

- ・14:00~16:15 研究発表(口頭発表)

	第2会場	第3会場	第4会場
14:00~14:25	A-①	B-①	C-①
14:25~14:50	A-②	B-②	C-②
14:50~15:15	A-③	B-③	C-③
15:15~15:25	休憩(10分間)		
15:25~15:50	A-④	B-④	C-④
15:50~16:15	A-⑤	B-⑤	C-⑤

《第1会場》

- ・16:15~16:25 閉会の挨拶：全国大学音楽教育学会 副理事長 櫻井 琴音

「令和の時代の音楽教育」

●講師：梶田 叡一 氏



●梶田 叡一 氏プロフィール：

京都大学文学部哲学科を卒業。文学博士。

国立教育研究所主任研究官、日本女子大学助教授、大阪大学教授、京都大学教授、京都ノートルダム女子大学学長、兵庫教育大学学長、環太平洋大学学長、奈良学園大学学長、桃山学院教育大学学長などを歴任

現在、聖ウルスラ学院理事長、兵庫庫教育大学名誉教授。

この間、中央教育審議会副会長・初等中等教育分科会長・教育課程部会長等を務める

著書：「自己意識の心理学」「意識としての自己」「和魂ルネッサンス」

「真の個性教育とは」「人間教育のために」「不千斎ハビアンの思想」ほか

◆研究発表（口頭発表） *すべて Zoom ミーティングによるオンライン方式

●研究発表：A-①～A-⑤ 《第2会場》

- ・ A-① 「コミュニティミュージック」の理論的視点 8
～我が国の学校と地域を結ぶ教育プログラムの開発に向けて～
藤山 あやか（滋賀文教短期大学）
- ・ A-② ピアノ・声楽レッスンのレディネスとなる教材作成 10
～いつでも、どこでも使える Google ドライブを活用して～
岡崎 豊治（個人会員）
- ・ A-③ 表現活動を通じた地域貢献 12
－短期大学と4年制大学での実践比較から－
宇杉 美絵子（昭和学院短期大学）
甲斐 万里子（和洋女子大学）
- ・ A-④ オンライン授業における伴奏付け指導の学習成果に関する一考察 14
－保育者養成校での実践例を通して－
山岸 徹（大阪キリスト教短期大学）
- ・ A-⑤ 小学校音楽科におけるエネルギー思考を活用した教材分析に関する研究 16
岡田 知也（香川大学）
桐山 由香（和歌山信愛大学）

●研究発表：B-①～B-⑤ 《第3会場》

- ・ B-① ゼミ活動における集団指導の課題 18
～学生の学習意欲を高める要因～
本野洋子（東京福祉大学短期大学部）
岡村 弘（元東京福祉大学）
- ・ B-② 保育者養成校における教員1名による新入生61名のピアノレッスンの試み 20
－反転授業とスマートフォン動画の活用－
福士 亜友子（柴田学園大学短期大学部）

- ・ B-③ 永井幸次の音楽教育とその思想Ⅰ …………… 22
 ー「女子音楽教科書 教師用 巻之一」を手掛かりにー
永井 正幸（大阪青山大学）

- ・ B-④ オンライン（Zoom）を用いたピアノレッスンにおける課題と改善 …………… 24
岡田 泰子（中部学院大学短期大学部）
杉山 祐子（中部学院大学短期大学部）

- ・ B-⑤ 乳幼児の表現遊びにおける音楽的コミュニケーションの役割 …………… 26
 ー未満児親子の手遊びのコミュニケーションの事例からー
梶間 奈保（島根県立大学）
居原田 洋子（美作大学短期大学部）
小池 美知子（松山東雲女子大学）

●研究発表：C-①～C-⑤ 《第4会場》

- ・ C-① コロナ禍における養成校のICTを活用したオンライン授業の効果と課題 …………… 28
佐藤 万利子（聖和学園短期大学）

- ・ C-② 小学校音楽科における歌唱指導の一環としての描画活動の有効性について …………… 30
長島 礼（関西学院大学）

- ・ C-③ コロナ禍における校内放送（ピアノ・アレンジBGM）の活用と授業実践 …………… 32
 ー小学校第1学年 共通教材《うみ》を中心としてー
赤塚 太郎（東京福祉大学）

- ・ C-④ 保育における身体表現活動の変遷に関する研究（2）意義と内容 …………… 34
門脇 早穂子（茨城大学）

- ・ C-⑤ 保育者養成におけるICTを活用した表現教育の開発 …………… 36
駒 久美子（千葉大学）

「コミュニティミュージック」の理論的視点

～ 我が国の学校と地域を結ぶ教育プログラムの開発に向けて ～

藤山 あやか (滋賀文教短期大学)

1 研究の目的

研究の目的は、「コミュニティミュージック」を我が国に浸透させるため、イギリスおよびドイツの理念と実践を応用させた「コミュニティミュージック」の概念を提案することである。「コミュニティミュージック」は、国際音楽教育協会 International Society for Education (ISME)の研究機関であるコミュニティ音楽活動 Community Music Activity (CMA)で、機能や目的が明記されているものの、その解釈は実践者および研究者に委ねられているため、各国で多様な「コミュニティミュージック」の理念に基づく実践が存在する。本研究では、我が国の学校と地域を結ぶ教育プログラムの開発に向けて、学校教育との関わりに着目した「コミュニティミュージック」の特徴および機能を明らかにしたい。

昨今、地域と連携した教育活動を展開することが求められており、学校現場で音楽アウトリーチ活動は盛んに行われているものの、音楽科のカリキュラムにまで踏み込んだ実践や具体的な方法論は定着していない。また、教員養成機関では、例えば小学校教諭免許を取得するための必要最低単位数は4単位のみと、音楽の教科に関する十分な専門知識と指導法を身につけるためのカリキュラムが構築されているとは言い難い。このような課題解決のため、教員養成における人材育成の視点から「コミュニティミュージック」の概念を踏まえた実践を定着させるための教育実践モデルを考察する。

2 「コミュニティミュージック」の特徴と機能

「コミュニティミュージック」の概念は、1982年、ISMEのCMAコミッションにおいて成立した。CMAでは、「コミュニティミュージック」は、それぞれが参加するコミュニティで音楽を普及し、発展させていく担い手となるように奨励する音楽活動であり、特に、フォーマルな音楽教育を補完し、その可能性を広げていくものとされている。

例えば、イギリスでは「コミュニティミュージック」が学術分野として確立しており、「コミュニティミュージシャン」という職業が存在する。学校を活動の場とする「コミュニティミュージシャン」は、ファシリテーターとして学校教育のコミュニティに介入し、歌唱や器楽学習のワークショップを実施している。そして、音楽教育者とのパートナーシップにより既存の音楽科カリキュラムを補完するとともに、その地域の社会的・文化的な特質に応じた適切なカリキュラム開発を行っている。イギリスのコミュニティ音楽家のリー・ヒギンズ Lee Higgins (2012)は「コミュニティミュージック」を大きく3つに分類し、その一つに「音楽リーダー・ファシリテーターの介入」を挙げている。イギリスの実践から、学校教育において地域の公的機関や民間団体等の学外機関と連携した音楽教育プログラムを実現させるためには、「音楽リーダー・ファシリテーターの介入」は重要な視点であることが分かる。一方、日本では塩原 (2018)が、アメリカ合衆国とイギリスにおけるコミュニティ音楽の成立

A-①

と考え方を考察し、コミュニティ音楽のコンセプトが音楽教育と密接に関わっていることを明らかにしている。本研究では、ヒギンズ (2012)と塩原 (2018)の論考に基づき、我が国の学校と地域を結ぶ教育プログラムの開発について示唆を得る。

3 ドイツの実践と教育的特徴

ドイツでは、移民の子どもたちの文化的学習を促進するために、公的資金を受けて展開される音楽教育プロジェクトが各州で存在する。その一例として、ハンブルク州の“Jedem Kind ein Instrument (どの子どもたちにも楽器を)”があげられる。当プロジェクトは行政と音楽学校、学校現場の連携体制のもとに実施され、音楽学校がファシリテーターの役割を担い学外のコミュニティとの連携を図ることで、学校における音楽教育の質の向上と地域の文化水準の向上を目指している。

2007年以降、JeKiに類似した音楽教育プロジェクトが各地で実施されるようになり、大学やフィルハーモニー管弦楽団の教育プログラムの一環として、地域での「コミュニティミュージック」の開発も進められている。ここでは、国際音楽教育雑誌 International Journal of Community Music 取り上げられたドイツの「コミュニティミュージック」の議論を踏まえ、音楽教育の視点に着目して、ドイツの「コミュニティミュージック」に関する考え方をまとめる。

4 「コミュニティミュージック」の類型化

「コミュニティミュージック」の定義と機能に基づき、諸外国および日本における音楽活動の実践を類型化する。そして、日本における音楽教育および地域における音楽活動の現状と課題について分析と評価を行い、学校と地域、大学が連携した「コミュニティミュージック」の実践は、どのようなモデルが理想的であるかを検討する。

5 まとめと今後の展望

日本には、イギリスやドイツの事例で取り上げたコミュニティミュージシャンや音楽学校などファシリテーターの役割を担う機関や制度はないが、教員養成機関が学校と地域を結ぶファシリテーターとして機能することで、地域の特性や資源を活かした教育活動が展開されると考える。今後、「コミュニティミュージック」を念頭に置いた教育実践に基づき、学校と地域を結ぶ教育プログラムのあり方を検証していきたい。

参考文献

- ・ Higgins, Lee. 「Community Music In Theory and In Practice」, 2012, Oxford University Press
- ・ 小川昌文, 「マイミュージック理論」の学校教育への導入の必然性～横浜国立大学附属鎌倉小学校・中学校における実践の省察を踏まえて～ 『横浜国立大学教育学部紀要. I, 教育科学』第4集, 2020, pp. 47-69
- ・ 塩原麻里, 「アメリカ合衆国と英国におけるコミュニティ音楽についての考察: 音楽教育との関連を踏まえて」 『国立音楽大学研究紀要』第52集, 2018, pp. 107-117.

ピアノ・声楽レッスンのレディネスとなる教材作成

～ いつでも、どこでも使える Google ドライブを活用して ～

岡崎 豊治 (個人会員)

私はこれまで中学校 14 年、高等学校 (視覚支援) 14 年、道立学校教頭・校長として 10 年、保育士・幼稚園教諭養成学校 12 年にわたり、音楽を通して教育活動を行って来た。この間一貫して大切にしてきたことは、授業 (レッスン) のレディネスとして、学習者が主体的・意欲的に取り組む事のできる教材作成である。

このことについて《保育士・教諭養成》《ピアノの初期指導》《声楽指導 (追体験による音楽性の獲得)》の三つの視点から述べる。

1. 保育士・教諭養成での教材作成 (と過程)

- (1) 学習者の目的意識に沿い、意欲を喚起できる題材 (曲) を選択しカリキュラムを編成。
- (2) 初心者用に右手に主旋律、左手は簡易な伴奏となるように編曲。(譜例 1, 2)
- (3) 独習を支える音源、動画の作成。(子どもうた約 200 曲 小学校歌唱共通教材 24 曲)

譜例 1

譜例 2

2. ピアノの初期指導での教材作成 (目で弾く → 頭で弾く)

- (1) 人間の情報獲得は、その 8 割を目から得ている。視覚に障害のある人達はその部分を聴覚と、特に情報の分類と整理、その上での記憶によって補っている。

音楽について言うと、彼らにとって必須の暗譜は、モチーフやフレーズを構造的に捉え、整理し記憶することで成立させている。皮肉なことに健常者 (晴眼者) は視覚により音符ひとつひとつを読み、それを音に置き換える作業を繰り返すこととなり、いわゆるアナリーゼの観点を失っている。その結果、効果的な練習が出来ず定着に課題が残る。

- (2) モチーフやフレーズを意識して譜読みをすることの出来る教材作成。

(ツェルニー 30 番、ブルグミュラー 25 番を例に)

A-②

譜例 3 譜例 4

譜例 5

譜例 6

ブルグミュラー25-10 「優しい花」

3. 声楽指導（追体験による音楽性の獲得）

- (1) 歌は人間にとって最も自然で直接的な表現である。そして表現力を高めるには音楽語彙を豊富に身に付けなければならない。
- (2) そのためには追体験を重ねる必要がある。
- (3) その具体的な方策として、十分にアゴーギクに配慮した範奏・伴奏音源を作成した。

※ 別資料「制作歌曲一覧」

4. いつでもどこでも使える環境づくり

- (1) 現在は様々な通信アイテムや端末が豊富に存在する。
- (2) 学生、指導者共に時間的な余裕が無くなって来ている。
- (3) これらの状況に鑑み、特に《保育士・教諭養成》《声楽指導》の教材については、Googleドライブを活用すりことにより、時と場所の制限を受けずに活用出来るようにした。

※ そのいくつかを紹介します。右のQRコードからどうぞ。



5. 以上を実践するために必要となる事から

- (1) 著作権の有無に関する精査、使用料の納入
- (2) 配布方法

私はこれまで多くの方々に利用して頂くべく手を尽くしたが、上記の2点に壁があった。

しかし幸いネットでの楽譜出版を行っている **楽譜@ELISE** @ELISE（アットエリーゼ）に出会い、今時めずらしく、電話も含め、学校等の公的機関での会計処理などに対するきめ細かな対応を得て、制作に専念することが出来ている。

引用文献

- ・「日本の子どもの歌」全国大学音楽教育学会 音楽之友社 2013年 p.56
- ・「盲学校で得た暗譜の方法」岡崎豊治 全日本音楽教育研究会 東京音楽図書株式会社 1990年2月号 p.78-81

表現活動を通じた地域貢献

—短期大学と4年制大学での実践比較から—

宇杉 美絵子 (昭和学院短期大学)

甲斐 万里子 (和洋女子大学)

1. 研究の背景と目的

本研究の目的は、まず、保育者養成校の地域貢献として、音楽表現分野からどのようなアプローチが可能かについて、短期大学と4年制大学とのカリキュラムに着目しながら一案を示すことである。それと同時に、地域に根ざした「かぞえうた」づくりの活動が、学生の地域に対する愛着や創作意欲にどのような影響を与えるかを明らかにする。

近年、日本各地で様々な実践が報告されていることから、大学による地域貢献への期待や注目度の高まりが窺い知れる。地域への貢献を目指した音楽分野の活動報告には、演奏発表や参加型のイベントの企画および開催を行なったもの(岩佐, 2021) ^{引用文献1}や、地域の芸術文化の振興を目指した音楽アウトリーチ事業(赤木, 2008) ^{引用文献2}等がある。これらは、大学や音楽が地域住民にとって身近なものになるような貢献の形を示していると見ることができるだろう。こうした従来の視点に加えて、本研究では、地域に対する親しみや愛着を育むという視点を加え、保育者養成大学の音楽分野が地域貢献できる形を提案し、その活動の効果を学生の意識への影響から解明することを目的とする。

研究は、研究プロジェクト「いちかわ かぞえうたプロジェクト」(注1)の一環として、筆者らの所属大学の所在地である千葉県市川市への地域貢献となるよう計画した。このプロジェクトは、子どもが表現活動を通して市川市の文化を身近に感じられるように、音楽表現分野、身体表現分野、造形表現分野の教員と学生が連携、協力し、市川市の文化を題材とした「かぞえうた」(注2)をまとめあげることを目指したものである。未来の「いちかわ」を担う子どもが遊びの中で地名や特産物、史跡等に親しむことができる遊び歌を学生と協働して創作・発信することで、地域文化遺産の活用および地域活性化に資する学生の教育・育成を目的としたものである。本発表では、当研究のうち、音楽表現分野が主体となって進めた学生との「かぞえうた」づくりの部分を取り上げる。

2. 研究の対象と手続き

2.1 研究の対象

本研究の対象は、昭和学院大学人間生活学科こども発達専攻(以下、昭短大)の第2学年17名と、和洋女子大学人文学部こども発達学科(以下、和洋女大)に在籍する第3学年6名である。

2.2 研究の手続きと質問項目

(1) 研究の手続き

手続きは、学生との「かぞえうた」づくりと、「かぞえうた」の作成後に行った質問紙調査である。作品および質問紙調査の結果の2大学間の比較、分析を通して、学生の地域に対する愛着への影響及び地域貢献を目指した活動の一案を、カリキュラム等との関係から考察し、提案する。なお、2020年

A-③

度の授業が新型コロナウイルス感染症の影響からリモートで進められたことから、本研究の作品づくり及び質問紙調査は、オンラインを中心に行なった。

(2) 学生への質問項目

質問紙は、自由記述と多肢選択の項目を混合した形式で作成した。質問は全 23 項目あり、「地域愛、また、市川への思いについての質問」と「音楽表現、遊び歌についての質問」、「創作活動後の振り返り」の2つのまとまりからなる。次に、質問項目のうち、基盤となるものを示す。

【地域愛、また、市川への思いについての質問】

- あなたが現在居住している区市町村への愛着はありますか。最も近いと思うものを1つ選んでください。
- あなたが育った地域にちなんだ歌や遊び、踊りなどを知っていますか。1つ選んでください。

【音楽表現、遊び歌についての質問】

- ピアノや楽器を習った経験はありますか（小中学校の授業内での学習を除く）。
- 今回のかぞえうた創作の取り組み以前に、歌ったり遊んだりしたことのある「数え歌」はありますか。最も近いものを1つ選んでください。

【創作活動後の振り返り】

- 「いちかわかぞえうた」の創作は易しかったですか、それとも難しかったですか。もつともあてはまるものを1つ選んでください。
- 「いちかわかぞえうた」の創作活動を通じて、新たに発見できたことや身についたことなど、学んだことを記述してください。

3. 結果と考察

本研究の結果は、次の3点である。①地域の文化について自ら調べ、面白さに気づく経験が、学生の地域への愛着を深める。②特定の地域の文化を新たに知ること、学生自らが居住する地域への興味を高め、地域への愛着の伝播につながる。③活動を通して漠然と感じた難しさや楽しさなどが、出来上がった作品に触れ、その作品のもつ魅力や効果との関係に気付くことで、今後の「保育者としての表現力」に活かそうとする意欲につながる。

【注】

- 1 中村光絵（和洋女子大学）を研究代表とするプロジェクト（令和2年度大学コンソーシアム市川産官学連携プラットフォーム協議会共同研究助成事業）の一環である。
- 2 「かぞえうた」は歌いやすい、覚えやすい特徴があることで設定した形式だったが、学生の取り組み過程で、「かぞえうた」に限定されない自由な形式による「遊び歌」が様々に生み出された。

【引用・参考文献】

- 1 岩佐明子「保育者養成課程の音楽ゼミナールにおける地域貢献の試み」『京都文教短期大学研究紀要』(59), 2021年, pp. 115~124.
- 2 赤木舞「『アーツ・イン・コミュニティ』プログラムにおける地域連携と学生の学び」『音楽芸術運営研究』(2), 2008年, pp. 59~73.

オンライン授業における伴奏付け指導の学習成果に関する一考察

—保育者養成校での実践例を通して—

山岸 徹 (大阪キリスト教短期大学)

1. はじめに

筆者の勤務先短期大学では、新型コロナウイルス感染拡大のため緊急事態宣言が発出されたことにより、2020年度前期授業のうち同年5月7日から約1ヶ月間、全ての授業を遠隔方式で実施する措置を採った。その後の同年度前期期間中は、全授業とも対面方式で実施した。

本発表は、筆者が担当した幼児教育学科2年生開講科目「幼児と表現1(音楽)」2クラスの授業に焦点を絞り、遠隔方式で実施した約1ヶ月間の実践記録、学生へのアンケート調査結果、及びその後の考察を加えた報告である。

2. 学校の状況

当該短期大学において2020年度は、授業開始が約1ヶ月遅れることとなったが、その間に以下に述べるような遠隔授業を実施するための十分な準備を行うことができたため学校全体としてはその後重大な支障なく、スムーズに遠隔授業に移行することができた。学校全体としてその間に取り組んだ主な内容は次のようなことである。①遠隔授業方法、使用ツールの早期の決定 ②非常勤講師も含めた教員全体に対して遠隔授業についての研修を複数回実施 ③全学生の自宅における通信環境の調査、必要に応じては改善に向けた指導 ④全学生を対象としたクラスごとのZoom接続テスト(クラス別ミーティング)を4月中に複数回実施

遠隔授業への移行がスムーズにできた上記以外の理由として、学校の規模が小さく、教職員全員の連携が取りやすいことも挙げることができる。情報機器の取り扱いに詳しい教職員が率先して他の教職員に支援するなどの活動も見られ、大きな支えとなった。

3. 対象学生と授業

筆者が担当する2年生Cクラス(23名)とDクラス(29名)の授業を本研究の対象とした。幼児教育学科ではあるが、Cクラスは半数が本学独自の「国際保育プログラム」を、Dクラスは全員が同じく本学独自の「幼児音楽プログラム」を履修している。かなり学習意欲の高いクラスと考えられる。

当該授業のシラバス作成時、遠隔授業を実施することは全く想定していなかったため、実際に授業に入る前の段階として、授業概要やテーマ、到達目標から逸脱しない範囲において遠隔授業が可能となるように授業計画の見直しを行い、順序を入れ替えるなどの措置を講じた。その結果、遠隔授業の間は主に伴奏付けの指導を行うこととして、受講学生にその旨を説明した。

授業形態としては表1に示すように同時双方向型を主とした。説明時や、学生一人ひとりの演奏発表時においては、主にZoomを用いた。また、毎回の授業終了後に学生が各自で撮影した演奏の動画や作成した楽譜などの演習課題を写真撮影した画像をeラーニング支援システムMoodleに提出させ、その後Moodle上に筆者がコメントを記入するという方式を採った。教材としては、筆者が作成したオリジナル教材の紙媒体(冊子)を事前に郵送して学生に配布した。伴奏付けの内容が主であるが、

A-④

譜法や合奏楽譜の編曲、弾き歌い実技指導も取り入れ、幼児期の表現活動を支援するための知識・技能、表現力を身に付けるための総合的な内容となることを目指した。

最終回の対面授業時において質問紙によるアンケートを実施し、使用した機材、各ツールの効果や授業後の達成度について学生の意識を調査した。

4. 考察・まとめ

実技を主体とする授業なので学習成果を定量的に捉えることは困難であるが、アンケート結果を以下のように考察することができる。伴奏付け指導は少人数または個人レッスンで行うのが理想的ではあるが、今回の結果としてクラス単位での遠隔授業における伴奏付け指導にも、主に技術や知識修得の面で一定の効果があったと考えられる。当該短期大学では ML (Music Laboratory) システムを導入しておらず、結果的に遠隔授業がその機能を補完することとなったとも考えられる。今回の調査対象となる期間が遠隔授業を開始した当初の 1 ヶ月あったため、初めての遠隔授業に対して学生が興味を持ったことも肯定的な感想につながったと考えられる。一方で対面授業のようにコミュニケーションを取ることができないことによって生じるマイナス面も明らかとなってきた。

<p>1) Zoom 接続開始 (ビデオカメラ: オン) 出席確認 (5 分)</p> <p>2) 郵送によって事前に配布した伴奏付け課題資料の説明 (和音の知識等を含む) (15 分)</p> <p>3) 「和音進行の骨子」または「自作伴奏」を各自練習し、楽譜を完成する。または、各自で演奏の動画を撮影し、ファイルを Moodle に提出する。(ビデオカメラ: オフ、Zoom 接続は自由) (20 分)</p> <p>4) 受講者一人一人の演奏発表 (全員が聴く): Zoom 接続再開 (ビデオカメラ: オン) (40 分)</p> <p>5) まとめ (10 分)</p>	<p>質問 1) 遠隔授業の連絡方法として使用した本学ポータルシステムについて</p> <p>質問 2) 遠隔授業の手段として実施したプリントなどの事前郵送について</p> <p>質問 3) 遠隔授業の手段として実施した Zoom について</p> <p>質問 4) 遠隔授業の手段として実施した Moodle について</p> <p>質問 5) 遠隔授業の授業方法全体について</p> <p>質問 6) 通信環境について</p> <p>質問 7) 使用した通信機器について 1. スマートフォン 2. パソコン 3. その他</p> <p>質問 8) その他の感想について (自由記述)</p>
--	--

表 1. 当該授業 (90 分間) の進め方の一例

表 2. 学生へのアンケート内容

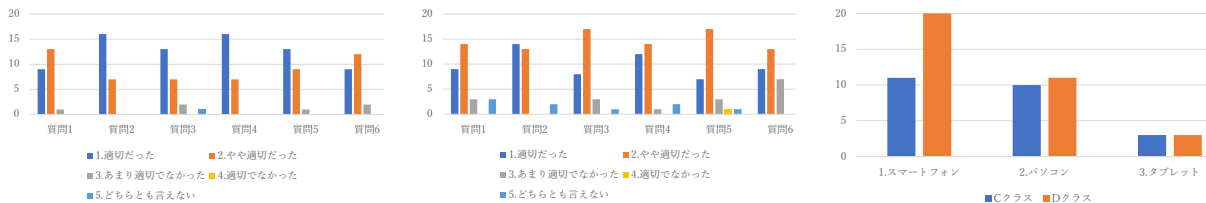


図 1. アンケート結果 (2C クラス)

図 2. アンケート結果 (2D クラス)

図 3. 使用機器 (複数回答あり)

<p>【肯定的な感想】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・遠隔授業だからこそ自分でやらないといけないと思い、家でピアノを練習する回数が増えた。緊張せずにできた。 ・質問に丁寧に答えてもらえた。授業時間に練習時間がもらえてよかった。 ・説明を集中して聞くことができた。説明を聞いた後、すぐにピアノで実践できてよかった。 ・一人ひとりが提出した課題をその後全員で聴き合うことができてよかった。 ・感染の心配せずに自宅で授業を受けることができてよかった。 ・自宅で自分のペースで練習して課題を提出することができた。 	<p>【否定的な感想】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・画面が小さいので目が痛かった。(スマホ利用) ・遠隔授業の期間、みんなで一緒に歌えなかった。 ・課題提出のため毎回演奏動画を撮影するのが大変だった。 ・カメラで顔を写すことに抵抗があった。 ・自宅の通信環境に問題があった。 ・対面授業のほうがわかりやすく質問もしやすい。 ・歌を直接聞いてほしかった。 ・決められた時間に自宅でピアノを弾くことが難しい場合があった。 ・毎回課題があって大変だった。他の授業の課題もとても多く、睡眠時間が十分に取れない。 <p>◎多くの課題がたまるとても辛い。(他の授業のことも含んでいる)</p>
--	--

表 3. 自由記述 (要点をまとめた抜粋)

参考文献

- ・山岸 徹「音楽表現力を引き出す伴奏付け指導メソッドの構築 - 授業実践を振り返って -」『大阪キリスト教短期大学紀要』第 58 集、2018 年、pp.78-87

小学校音楽科におけるエネルギー思考を活用した教材分析に関する研究

岡田 知也 (香川大学)

桐山 由香 (和歌山信愛大学)

1. はじめに

平成 29 年 3 月に公示され令和 2 年度より全面実施されている新しい小学校学習指導要領（以下、新学習指導要領）では、改訂の基本方針の一つとして「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善(アクティブ・ラーニングの視点に立った授業改善)を推進することが求められている。

その際の留意点の一つとして、児童に目指す資質・能力を育むために「主体的な学び」、「対話的な学び」、「深い学び」の視点で、授業改善を進めるものであること、学習活動（言語活動など）の質を向上させることを主眼とするものであること、「深い学び」の鍵として「見方・考え方」を働かせることが重要になること、等が挙げられている。「見方・考え方」とは、「どのような視点で物事を捉え、どのような考え方で思考していくのか」というその教科等ならではの物事を捉える視点や考え方である。それは各教科等を学ぶ本質的な意義の中核をなすものであり、教科等の学習と社会をつなぐものであることから、児童生徒が学習や人生において「見方・考え方」を自在に働かせることを可能にすることにこそ、教師の専門性の発揮が求められる。音楽科においては、音楽的な見方・考え方とは「音楽に対する感性を働かせ、音や音楽を、音楽を形づくっている要素とその働きの視点で捉え、自己のイメージや感情、生活や文化などと関連付けること」と示されている。

本研究の課題意識は、これらの求められている内容に対して、これまで実践されていた教材研究（音楽科においては多くの場合、教材となる楽曲の分析）で十分なのだろうかというところにある。児童の学びが深まろうとしている局面において、教員は専門性を発揮した教材研究で、その瞬間に備えて学びの深まりに応える必要があるのではないだろうか。

本研究では、深い学びに寄与する教材研究の一手法として、エネルギー思考による楽曲の分析方法（いわゆる保科理論）¹⁾を用いた教材研究を試み、それらが生み出すと考えられる新しい学習場面について拙案を提示する。

本要旨では詳細は省略するが、エネルギー思考による楽曲の分析では表現の中核となる「重心」となる音符をいくつかの条件に照らし定める。保科は条件として5つを示しているが、そのうちの1つに「『バウンド分割』と判断できる音群の最初の音（付点音符を含む）」という項目があり、付点音符が音楽表現に大きく関わっていると考えられる。今回は、この付点音符の条件に着目することを試みたい。前述の課題意識に基づき、小学校音楽科の歌唱共通教材24曲のうち、これまでに小学校1年生の「うみ」を取り上げて試案を示した²⁾。

本発表では付点音符の条件に着目するのであるが、共通教材において付点音符の役割が重要であると考えられる楽曲は多く、例えば「かたつむり」「茶つみ」「ふじ山」「ふるさと」等を挙げるができる。本発表においては小学校1年生の「かたつむり」を取り上げる。

A-⑤

2. 小学校音楽科における「深い学び」

新学習指導要領においては、基本方針の一つとして「育成を目指す資質・能力の明確化」が挙げられている。学校教育において長年その育成を目指してきた「生きる力」を改めて捉え直し、その上で「生きる力」をより具体化し、教育課程全体を通して育成を目指す資質・能力を明確化することが示されている。すなわち、「生きて働く「知識・技能」の習得」、「未知の状況にも対応できる「思考力・判断力・表現力等」の育成」、「学びを人生や社会に生かそうとする「学びに向かう力・人間性等」の涵養」の三つの柱で資質・能力を整理するとともに、各教科等の目標や内容についても、この三つの柱に基づく再整理がなされている。そして、これらをどのように学ぶかという視点から求められているのが「主体的・対話的で深い学びによる学習過程の改善」である。新学習指導要領総則第3「教育課程の実施と学習評価」の1「主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善」に、次の通り示されている³⁾。

「児童の主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善を行うこと。特に、各教科等において身に付けた知識及び技能を活用したり、思考力、判断力、表現力等や学びに向かう力、人間性等を發揮させたりして、学習の対象となる物事を捉え思考することにより、（中略）知識を相互に関連付けてより深く理解したり、情報を精査して考えを形成したり、（中略）思いや考えを基に創造したりすることに向かう過程を重視した学習の充実を図ること」

すなわち、児童が「学習の対象となる物事を捉え思考する」「知識を相互に関連付けてより深く理解する」「思いや考えを基に創造したりする」姿に導く学び＝「深い学び」が求められているのである。このことから筆者は、児童の学びが深まろうとしている局面においては、これまでの教材研究（楽曲分析）の内容では不十分ではないか、教員の専門性に基づく「引き出し」をさらに準備してその瞬間に備え、児童の学びの深まりに応える必要があるのではないかと考えるに至ったことが本研究に結び付いているのである。

註及び引用文献

- 1) 保科 洋(1998)『生きた音楽表現へのアプローチ -エネルギー思考に基づく演奏解釈法-』音楽之友社、p.94、p.131、他
- 2) 岡田知也、桐山由香(2021)「小学校音楽科における「深い学び」に寄与する共通教材の分析(1) -エネルギー思考に基づく「うみ」の分析とその活用-」『全国大学音楽教育学会関西学会誌第2号』
- 3) 文部科学省(2017)『小学校学習指導要領』、p.8

参考文献

- 真篠 将(1986)「戦後四十年をふりかえって 学習指導要領の法的拘束力」『季刊音楽教育研究 46』音楽之友社
- 岡田知也(2010)「教員免許状更新講習の内容構築に関する一考察 -受講者のニーズを手がかりとして-」『学校音楽教育研究』日本学校音楽教育実践学会
- 文部科学省(2017)『小学校学習指導要領解説 音楽編』東洋館出版

ゼミ活動における集団指導の課題

～ 学生の学習意欲を高める要因 ～

本野 洋子 (東京福祉大学短期大学部)

岡村 弘 (元東京福祉大学)

1. はじめに

本学では、保育児童専門演習(4年生春期)・保育実践演習(4年生秋期)と言う科目名の通称ゼミという授業があり、春期と秋期で科目名称は異なるが、1年間を通じたカリキュラムによって授業が進められる。本野と岡村が担当した『表現』領域のゼミは、学生たちが4月から約10か月間主体的にミュージカルを創作し、2月のゼミ発表会で上演するという総合的な表現活動を行うことが目的である。

本ゼミでは、平成31年度(令和元年度)は8名が登録した。平成30年度の活動についての報告は2019年度大会(令和元年)において発表したが、前回のメンバーと人数等大きく条件が異なることから本発表は平成31年度のゼミ活動を振り返り、どうすれば学習意欲が高まっていくのかを明らかにし、その過程でゼミ活動における集団指導の在り方に関して見えてきた課題を報告することとする。

2. ゼミ活動の振り返り

学生の新年度当初の様子を見てみると、音楽が好き、ミュージカルがやりたい、先輩方の舞台を見て憧れて参加した学生などゼミ選択の動機はとても肯定的であったが、実際に4月のゼミ開始直後は、授業が始まっても教員から声をかけるまで誰からも活動しようとはせず、やる気もなくただ座って他人からの指示を待っている学生がほとんどであった。その上無断遅刻・欠席をする学生も多かった。実際9名登録した学生の中でまったく出席せず履修放棄した学生が1名、体調不良を理由に2月の本番には出演せず、体調の良い日だけ出てくと申告した学生が1名おり、その結果主として7名(女子学生6名、男子学生1名)によってこのゼミを構成することとなった。

前回発表した平成30年度以前のゼミと同じように、教員は主導権を持つことはせず、ミュージカルを創作する上での流れ、役割分担、脚本あるいは台本作りの方法、音楽創作の方法、舞台構成、舞台美術の制作方法、衣装の制作方法など基礎的な知識の提供に徹し、学生の様子を見守っていた。安易な気持ちや憧れで入ってきた学生は、実は練習は厳しく、簡単に休めない、など現実を知ると次第に苦しくなり、やめたいと申し出る学生もいた。学生アンケートによると、5月6月にやめたいと思っていた学生は7割に上っている。この問題点を解決するために、教員はゼミ長らと相談し、直接教員からではなくゼミ長から、欠席・遅刻は必ず連絡すること、授業開始時に自主的に打ち合わせ等準備をすること、などの約束をさせた。しかし、教員が何か指示しない限り、参加しても壁に張り付いて何もしない学生や、スマホを操作している学生、場所が音楽室であったので、勝手にキーボードを弾いている学生などまとまりもなく、しかもゼミ長自らが私用などのために遅刻してきたり、と人間関係はばらばらであった。

夏季休暇が終わった8月下旬に、このような状態では2月までの一年間を通した長いスパンでは、2月のゼミ発表まで緊張感を持続させることができないと考え、ちょうど11月初旬に文化祭があることから、この文化祭に来る子供たちなど一般の来場者に小さな音楽劇を見せることを提案した。前回の発表の質疑応答においても人前での発表がモチベーションの向上につながるとのご意見を頂戴していた

B-①

こともあり、これによってモチベーションが上がってくることを期待したのである。期日が迫っていることから2月のゼミ発表に関連させた昔ばなし「浦島太郎」をすることにした。脚本は昔ばなしの浦島太郎の原作を変更せずに作成させた。練習期間1か月という短い間に仕上げなくてはならなかったが、一応形だけは整い当日は子供たちの反応もあり学生は手ごたえを感じていた。学生へのアンケートでは、「楽しくできた。」「自信を持って取り組むことができた。」「子供たちを巻き込んでできたので良かった。」など全員肯定的な回答であった。

しかし、逆にこの上演がある程度うまくいったことが「この程度の練習で発表できる。」という学生の自信と安心感につながり、結局2月までの盛り上がりには繋がらなかった。そこで、嘗てのゼミで行ってきた小集団によるアクティブラーニングを取り入れて授業を進めようと考えた。すなわち基本的には学生同士が話し合っより良い方法を見つけだしていくが、学生たち同士で解決できないときには指導者が動機付けや方向付けを行うといった形である。しばらくこのやり方で、学生たち自身の発言や動きを見ていたが、ゼミ長への反発などから主体的・能動的な行動が出てこなかったのも、何度もゼミ会議を開き各自の意見を言わせる中でより良い方法を見出そうとした。この段階で指導者が介入することでようやくゼミの中での各自のやるべきことの見通しができてきた。

そして1月になり、大道具係が背景を描き始めるときになって、全員が自主的に授業時間だけではなく、放課後や空き時間を使って舞台装置制作に取り組むようになっていった。年明けの最後の仕上げでは、未だ恥じらいもありなかなか声が出なかったり、動作が小さかったりという問題や、セリフや歌詞が覚えられていないということもあったが、各々がそれでは周りに迷惑をかけると自覚し、自分で練習を重ね徐々に舞台上で通用する動きや声を出せるようになっていった。しかし、1か月前になっても人間関係はぎくしゃくしたままであった。ようやく三日前になって、目の前に上演の舞台が完成し、お互いの気持ちを洗いざらい出させるミーティングをすることによって、疎んじていた相手の考えに共感することができ、練習にも力が入りだした。発表会当日となり上演は無事終わり、最後は学生全員が一つのをみんなで作り上げる達成感を味わった。学生のアンケートでは最も感動したこととして「最後の二日でみんなが揃ったこと」「団結力が生まれたこと」「まとまれたこと」「本番が終わった後、ゼミの仲間の顔を見たとき」などと回答している。

3. 考察・まとめ

「表現」とは相互のやり取りの構築、すなわちコミュニケーションであり、コミュニケーションを経てさらに新たな人間関係を作っていくものであるとすると、このようなゼミ活動における学習意欲の高まりをもたらすものは、意思の疎通でありコミュニケーション力ではないだろうか。今回のミュージカル創作に取り組むにあたっては、意見を出し合ううちに他者とぶつかることもあり、人間関係も円滑に進まないという苦みの過程を経ることによって、アクティブラーニングの中で次第に同じ方向を向くことができ他者の考えに共感し、その共感性を互いに意識することで改めて他者とのコミュニケーションの大切さに気付き、学生たち自身で学習意欲を高めあっていたと考える。

すなわち集団指導において、教員は学生個々の個性を大切にすると同時に、集団の中での自分自身の立ち位置を見極めさせ、学生たち同士での意志の疎通を図れるような環境設定をどのように整えるべきなのか、今後の課題としたい。

保育者養成校における教員 1 名による新入生 61 名のピアノレッスンの試み

—反転授業とスマートフォン動画の活用—

福士 亜友子 (柴田学園大学短期大学部)

1. はじめに

本学のピアノレッスンは、令和元年度まで、非常勤講師も含めた教員 6 名による一人 15 分の個人レッスンであった。しかし、令和 2 年度より、教員 1 名によるグループレッスンに切り替わり、それを筆者が担当することになった。保育科の新入生 61 名の授業「音楽(1)」である。少しでも個人レッスンに近づけ、学生一人一人が満足できるよう考案したのが、「反転授業」と「フォローとしての動画提出による指導」である。

2. 授業「音楽(1)」の実際—反転授業とフォロー

令和 2 年度の授業「音楽(1)」の受講者は、保育科 1 年 61 名 (A 班 31 名、B 班 30 名) で、そのうちピアノ未経験者は 39 名、バイエル後半・ブルグミュラーレベルが 16 名、ソナチネ・ソナタレベルが 6 名であった。A・B 班それぞれ 90 分の演習科目であり、通年で開講されている。授業は、「反転授業」と「フォローとしての動画提出による指導」で構成した。

反転授業とは、内山(2019)によると「通学課程の大学において学生があらかじめオンライン講義を視聴し、授業内ではこれについて議論をする」¹⁾と述べている。「音楽(1)」では、学生が各自で授業サイトの手本動画を視聴しながら学習(練習)した上で、対面のグループレッスンに出席するようにした。手本動画は、筆者が出演・演奏しており、Microsoft Office365 の SharePoint に掲載する(図 1)。対面のグループレッスンは、1 グループ 5~10 名(学生のピアノ歴により、A・B 班それぞれ 4 グループずつ)で、各 20~30 分間ずつ実施する。一人一台電子ピアノに座り、筆者が一人ずつまわって演奏のチェックをする(図 2)。チェックを受けている学生以外は、ヘッドフォンをした状態で練習を続ける。

「フォローとしての動画提出による指導」は、授業内容を習得できなかった学生のフォローである。中には、習得できているが自主的に希望する学生もいた。最初、①動画提出による指導・②オンラインレッスン・③時間外の対面レッスンのいずれかを選択し受講できるようにした。しかし、オンラインレッスンに使用した Office365 の Teams は、途中で音が聞こえなくなるなどの乱れが生じるため、学生たちに不評であった。また時間外の対面レッスンは、昼休みや放課後に実施するため時間に縛られることから、いつも来る学生は限られていた。そのような中で、動画提出による指導は、学生が自由な時間・場所で、自身の演奏をスマートフォンで録画し、Office365 の Yammer プライベートメッセージに送信するという手軽さがある。教員(筆者)も空いている時間に PC でチェックできるため、さほど労力を必要としない。前・後期合わせて約 500 件の動画が提出され、指導している。図 3、4 のように、学生から提出された動画を教員(筆者)が視聴し、アドバイスをメッセージで送るといふも

B-②

のである。マンツーマンでの指導になるため、遠隔の個人レッスンとも考えられ、学生とのコミュニケーションも図りやすい。

レッスンでは、ピアノ曲と弾き歌い曲を課題としている。ピアノ曲の合格の平均は、前期 16.2 曲、後期 8.3 曲、弾き歌い曲の合格の平均は、前期 9.8 曲、後期 16.2 曲である。ピアノ曲は、徐々に難易度が上がり、曲が長くなるため、後期の合格数は減少している。一方、弾き歌い曲は、ピアノの技術の向上に伴い、弾ける曲が増えるため、後期の合格数は増加している。ピアノ曲・弾き歌い曲の合格が、前・後期すべて平均以上が 13 名、すべて平均以下が 7 名であり、これらの学生に共通することは、他の科目の成績とも関連しているということである。

本学で授業の最後に実施している学習アンケートでは、2 年次の「音楽(2)」も引き続き筆者のピアノレッスンを受講したいという意見が多数寄せられた。そして、令和 3 年度の「音楽(2)」(筆者担当)は、選択科目にもかかわらず 61 名中 59 名が受講している。これらのことから、学生にとって満足いくレッスンが展開できたのではないかと考えられる。



図 1 授業サイトの手本動画

(SharePoint) ※楽譜は、²⁾を使用



図 2 対面のグループレッスン



図 3 学生の動画提出 (Yammer)

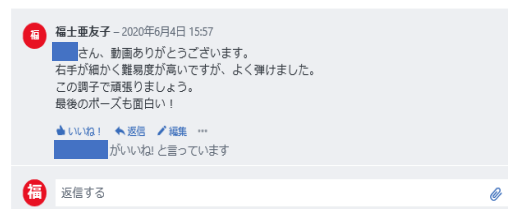


図 4 教員(筆者)のアドバイス (Yammer)

3. おわりに

反転授業とスマートフォン動画の活用により、対面のグループレッスンのみでは行き届かない部分を補い、より個人レッスンに近いピアノレッスンを、教員 1 名対新入生 61 名において可能とした。また偶然ではあるが、コロナ禍で遠隔授業になった期間も、授業サイトと動画提出によって即座に対応できたのである。課題としては、他年度の学生たちにも、同様のピアノレッスンが適用できるかどうかの検証である。今後も、学生たちの指導と研究を深めていきたい。

【引用・参考文献】

- 1) 内山淳子著「V生涯学習の多様な学習方法—7 遠隔教育による学習」／香川正弘・鈴木眞理・永井健夫 編『よくわかる生涯学習—改訂版—』ミネルヴァ書房,2019年,p.85
- 2) 大学音楽教育研究グループ編『2 訂版 歌唱教材伴奏法—バイエルとツェルニーによる』教育芸術社,2017年,p.4

永井幸次の音楽教育とその思想 I

— 「女子音楽教科書 教師用 卷之一」を手掛かりに—

永井 正幸 (大阪青山大学)

1. はじめに

永井幸次(1874~1965)は、明治から昭和にかけて作曲家・音楽教育者として活動し、関西の音楽教育の発展に尽力した人物である。永井は、1915(大正 4)年の大阪音楽学校(現大阪音楽大学)創設者としての功績が称えられているが、数多くの作曲作品を手掛け、多くの音楽教科書の編纂などを精力的に行っていたことは意外にも知られていない。永井は、学校音楽教師の頃から児童の「歌唱指導」への課題を唱えており、大阪音楽学校創設前より幼稚園・小学校教諭を対象とした講習会等を通して、保育者教育者養成における音楽教育を実践していた。

ゆえに、永井は幼児から大人まで幅広い年齢を対象とした音楽教育の実践家であったといえる。永井は何を思い、音楽教育にその一生を捧げたのであろうか。

本発表では、永井の音楽教育思想に迫る第一歩として、大阪府立清水谷高等女学校教諭時代に友人の田中銀之助(1880~1947)¹⁾と共に編纂・刊行された「女子音楽教科書 教師用 卷之一」を手掛かりに、当時の永井が音楽教育に求めていた理論と実践方法について述べる。

なお、書籍名や引用文に出てくる旧字体については、すべて新字体に改めた。

2. 永井幸次について

1874(明治 7)年鳥取市に生まれる。永井が最初に音楽に触れたのは、少年期に叔父から貰った音楽取調掛発行の「小学唱歌集 初編」であった。その後、プロテスタントであった父方の叔父や、鳥取を訪れたアメリカ人宣教師タルカット(後の神戸女学院創設者)から讃美歌を習い、オルガンにも取り組んだ。幼少時よりキリスト教の影響を受けた永井は、13歳で洗礼を受ける。本格的に音楽を学び始めたのは15歳の時で、アメリカ人宣教師から発声法などを学んだ。1892(明治 25)年から4年間、東京音楽学校で学び、卒業後は静岡県尋常師範学校や鳥取師範学校での勤務を経て、1905(明治 38)年に神戸市立中宮小学校に着任する。翌年、大阪府立清水谷高等女学校教諭に転任し、卒業記念音楽会の開催や小学校の音楽担当教員を対象とした講習会開催、音楽教科書の作成など、音楽教育活動の場を広げていく。

1915(大正 4)年の大阪音楽学校創立後は教授内容や施設面の充実を図るため、教科書などの出版収益を学校運営費にあてながら音楽教育環境の整備に奔走する。このような経緯を経て、1951(昭和 26)年には短期大学、1957(昭和 32)年には付属児童音楽学園、1958(昭和 33)年には4年制大学を設置し、今日の大阪音楽大学の礎を築いた。

B-③

3. 「女子音楽教科書 教師用 卷之一」に見る永井と田中の音楽教育観

永井と田中は「女子音楽教科書 教師用 卷之一」緒言の中で、教科書編纂の動機について「著書としては僅かに数種の歌曲集なるものを散見するのみにして、未だ系統的教科書あるを見ず」²⁾と述べ、理論と実技を順序立てて学ぶことができる教科書の必要性を説いた。また「従来とり来りし範唱式(注入的)教授法は最早陳腐に属した。こんな方法では到底実力の養成が出来ぬ」³⁾と、詰め込み式の音楽教育方法を批判し「実力養成の側より見たる吾輩の主張せる教授法は(中略)開発的教授法と称するを適当なりと信ず」³⁾と述べ、生徒の自発的な学びを促す指導法として開発教授法を挙げている。開発教授法は「暗記・注入を主とする教授法に対し、子どもの有している諸能力を発展させようとする教授法」⁴⁾のことで、明治期に我が国に入ってきた教授法である。

「女子音楽教科書」は、呼吸法、発声練習、音階・音程練習、楽典、歌曲練習などが「易より難に簡より複に」⁵⁾の方針の下、整然と配置されている。さらに、その指導手順として「其の難易の順序によりて排列せる歌曲に、悉く楽典上の事項を含め」⁶⁾と述べられているように、楽典なら楽典、歌唱なら歌唱と項目を分けて学び進めるのではなく、一曲を学ぶ中で、各学習項目を関連付けながら学ぶ方法が示されている。また、教師用には伴奏譜が付けられており、和声感の育成を重視した永井らの考えが取り入れられている。

楽典や歌唱練習などの音楽基礎が体系化された「女子音楽教科書」は、永井らの、理論と実践の系統的且つ複合的な学習こそ生徒の実力を伸ばすことにつながるとの考えが強く反映された教科書であったといえる。

今後は、これらの教科書に加え、永井自身が著した自伝や「永井幸次作品目録」等から、永井の音楽教育思想に迫り、現代の保育者養成に通じる音楽教育理論と実践方法を再構築していきたい。

【注】

- 1) 田中は、兵庫県立神戸高等女学校(現兵庫県立神戸高等学校)の教員を長く務めた。永井とは「女子音楽教科書」の他に、各々のイニシャルが付けられた「N・T楽譜シリーズ」も出版している。
- 2) 永井幸次、田中銀之助 編「女子音楽教科書 大阪開成館蔵版 教師用 卷之一」大阪開成館、1911、1頁
- 3) 同前、9頁
- 4) 山崎英則、片上宗二 編「教育用語辞典」ミネルヴァ書房、2003、53頁
- 5) 永井幸次、田中銀之助 編「女子音楽教科書 大阪開成館蔵版 教師用 卷之一」大阪開成館、1911、1頁
- 6) 同前、4頁

【参考文献】

- ・永井幸次「来し方八十年」大阪音楽短期大学楽友会出版部、1954
- ・鎌谷静男「琥珀のフーガ — 永井幸次論考」音楽之友社、1998
- ・藤本葉子「永井幸次作品目録」『音楽研究:大阪音楽大学音楽博物館年報.21』大阪音楽大学、2005
- ・永井幸次、田中銀之助 編「女子音楽教科書 大阪開成館蔵版 教師用 卷之一」大阪開成館、1911
- ・永井幸次、田中銀之助 編「女子音楽教科書 大阪開成館蔵版 生徒用 卷之一 改訂版」大阪開成館、1930
- ・大阪音楽大学七〇年史編集委員会「大阪音楽大学七〇年史 楽のまなびや」大阪音楽大学、1988
- ・八木真平「兵庫の音楽史」神戸新聞出版センター、1988

オンライン (Zoom) を用いたピアノレッスンにおける課題と改善

岡田 泰子 (中部学院大学短期大学部)

杉山 祐子 (中部学院大学短期大学部)

I. 問題と目的

2020年度、COVID-19感染拡大により、大学での授業は多大な影響を受けた。これまで当たり前としていた登校・対面での授業が不可能となったことから、急速なWeb授業の対応を迫られた。そのため、2020年度はピアノ指導をZoomによるオンラインとし、教育内容の伝え方や学生の理解し易さを創意工夫し、学修目標の達成を図ったことで、Zoomであっても個別のレッスンが成立するに至った(岡田、杉山,2020)¹。そこでの明らかになった課題は、COVID-19前は可能であった「人前での演奏に慣れる」と「他者への配慮ができる」ことの欠如であった。オンライン(Zoom)であっても”自己と他者”を意識した学び合いの重要性が認識された(岡田、杉山,2020)²。

そこで、学び合う授業の構築を目的とし、2020年後期よりワークシートを活用し、自己の演奏の振り返りと他者の演奏への気づきをメッセージとして言語化する取り組みを加えた。特に、相手を読むことを前提としたことで、お互いに学び合う機会とした。この”自己と他者”を意識することは、表現活動の重要な要素である。COVID-19終息後も、オンライン授業が教育形式の1つとなり、他者と学び合い自ら気づく学習の方法の可能性はある。

II. 方法

対象者：C短大保育者養成課程1年生84名。期間：2020年9月22日から2021年2月2日。

手続き：ピアノ指導の授業(1教員8名程度)でハイブリット型授業を計15回。オンライン(Zoom)では、学生全員が終始担当教員のZoomに参加している。したがって全員が聴講している中で演奏し、他者のレッスンも聴講する。レッスンの内容をワークシートにまとめ、次回の対面授業で、待ち時間にお互いに読み合う。ワークシートには、受講生全員分のレッスンを聴きながら、先生からの助言や、レッスンのポイントを記入する。「曲に対する先生の助言」の欄には、自分の予習復習として、曲への造詣を深める。同じ曲でも、多様な演奏や先生の助言があることを理解する。「学生へのメッセージ」の欄には、自分の気づきや感想を演奏者に届ける気持ちをもって記入することとした。この欄は、主として伝えることを目的に書く。

質問紙調査：全授業終了後、Web上で、レッスンでの“自己”意識と“他者”の存在についての質問調査を実施(倫理申請番号C20-0026)。質問紙調査の項目は、問1)仲間の演奏を聴いた感想、問2)仲間の存在が自分の演奏に与える影響、問3)仲間のレッスンへのメッセージを記入する際に、工夫・努力したこと、問4)仲間からのメッセージによる自分の学習変化、問5)ハイブリット型需要での学習意欲。

III. 結果と考察

回答は自由意志とした。47名の回答を得、回答率は56%であった。図1に問1)2)をまとめた。両質問の回答で9割以上が学習の手応えを持っていた。仲間の存在を好意的に受け入れ、自分の学びに

B-④

取り入れていることが分かった。理由の自由記述では、仲間の努力を見ることの刺激や、同じ曲であっても、それぞれ表現の仕方の違いに気づけたことが挙げられていた。問2)では、演奏を聴かれる立場になった場合の自由記述には、「緊張」のキーワードが多く書かれていた。人前での発表は、表現において大切な要素であるが、対面授業が減少し、緊張が増している様子が窺えた。その緊張感を貴重な経験と捉えられるよう見届けが重要と分かった。また、仲間に聴かれていることは、次の「問4のメッセージをもらうことにつながると認識している様子も窺われた。このように、オンライン授業であっても、仲間とつながっている意識を持ち学習意欲を高める機会になったと考える。

問3)のワークシートにメッセージを記入する際の工夫・努力したキーワードでは、「良い所(点)」との回答が最も多かった(表1)。「具体的に書く」の意見から、良い所を発見しよう、分かり易く伝えようなど、他者を思いやる観点が記載されていた。また、先生の助言をもとに記入することで、自分のコメントの正誤を確認する姿勢は評価される。しかし初期には、コメントを言語化することが困難な学生も見られた。そこで、中間期に、好例なワークシートの提示と、問題があるワークシートには、どの観点が必要であるかを具体的に全学生に示す機会を持った。その指導を行うことで、聴く観点が理解され、書かれた相手が嬉しく受け止められるよう配慮することにも気づいていった。

問4) 仲間からのメッセージによる自分の学習変化については、学習意欲の向上が読み取れる(表2)。指導者以外の他者の存在が自分にとって学習の動機づけになる関係が気づかれていることは、この取り組みの最も重要な成果とみられる。また別の切り口として、自分の演奏への気づきや客観視できたという意見もあり、メッセージにより自分の演奏を俯瞰できる機会となっていた。

IV. まとめ

オンライン授業では、仲間意識が希薄との課題もある。しかし、学生は一緒に学ぶ仲間との成長を目指そうとしていることが見られた。教師と学生の1対1の授業であっても、その様子を仲間が共有し、メッセージを書く行為は、仲間の絆を築くことに有効であったと考えられる。自分や仲間の学習の客観視や、同じ曲でも表現が多様であることを実感していた。オンライン授業のメリットとして、手元や表情など画面から良く見えることにより、観察力の育成も可能であった。このようにアフターコロナでは、対面とオンラインのそれぞれの良さを生かした授業づくりを目指したい。

V.文献

- 岡田泰子、杉山祐子,2020「実技習得のための遠隔授業の可能性について」,中部学院大学短期大学部第2回FD研修.
- 岡田泰子、杉山祐子,2020「ピアノレッスンの授業形態の変化について」,全国大学音楽教育学会中部地区学会8月月例会.

	問1)	問2)
勉強になった	33名(70%)	28名(60%)
まあまあ勉強になった	12名(26%)	18名(38%)
あまり勉強にならなかった	2名(4%)	1名(2%)
勉強にならなかった	0名(0%)	0名(0%)
計	47名	47名

図1 レッスンでの他者(仲間)の存在について

表1 ワークシートへの記入で工夫した点の主なキーワード

キーワード	(人)
良い点	9
具体的に	3
先生の助言をもとに	3
うれしくなること	3
細かく 詳しく	3
素直に、正直に そのまま	3
思ったこと	2
頑張れる	2

表2 ワークシートを読んで思いや学習への変化があったかの主なキーワード

キーワード	(人)
頑張ろう	10
発見・気づき	9
客観視	7
うれしかった	6
やる気	4
理解されている	2
励み	2
努力しよう	2

乳幼児の表現遊びにおける音楽的コミュニケーションの役割

—未満児親子の手遊びのコミュニケーションの事例から—

梶間 奈保（島根県立大学）

居原田洋子（美作大学短期大学部）

小池美知子（松山東雲女子大学）

Ⅰ 問題と目的

乳幼児が養育者との間で交わすコミュニケーションについて、音楽性の発現として着目されており、乳児の発達と学習全体を支える重要性が指摘されている¹。乳児の発声はことばが未発達の状態ではあるが音の輪郭線ともいえ、それに応答するかたちで乳児と関わる保育者や養育者がマザリーズ（motherese、対乳児発話）や唱えことば、歌いかけを通して音楽的なコミュニケーションを行っているといえよう。さらにこれらが幼児期になると、友だちを含める他者と共有しながら様々な表現と絡み合い、遊びの中で見られるようになり、歌遊びや表現遊びとして音楽的な表現を伴う行動へとつながっていく。

このように乳幼児の音楽的な表現は、生後間もない頃から垣間見ることができる生得的なものであり、保育や幼児教育においても子どもの姿を捉える重要な視点といえ、乳幼児の音楽性はより広い視野で子どもの音楽的発達を捉える必要がある。例えば、“歌を歌う”“楽器を鳴らす”というような一般的な音楽行動だけに着目するのではなく、子どもとの何気ない会話や身振りの中にも、相手の声や動きに合わせて表現することや、見つめ合いながら互いにタイミングを図り表情を交わす行為など、ごく自然に見られる場面においても音楽的な表現が見られる。つまり音楽的コミュニケーションは子どもと大人の双方が関わるのが重要であるといえる。

そこで本研究では、乳幼児の音楽的コミュニケーションを見出す手がかりとして、親子で行われる音楽を伴う表現遊びに着目する。乳幼児のコミュニケーションについては、ことばのやりとりのみで自分の考えや意図を示しながら相手とコミュニケーションをとることはまだ難しく、動きを伴う音楽表現が、遊びのイメージや自身の感情や思いを共有することができる²との指摘もある。なお、本研究の対象とする表現遊びは、主に養育者が歌いかけながら指を動かす簡単な指遊びや身体を動かして触れ合うからだ遊び、その他にわらべうたなども含み、これらをまとめて表現遊びと称している。

表現遊びに関連する保育・幼児教育の研究では、保育現場における手遊びの有効性に着目する研究も散見されるが、古市（2005）の幼児の身体表現の特徴と手遊びの習得プロセスを身体的発達で捉えた研究³や小池・安藤（2020）の既存の手遊びと幼児の年齢発達に関する研究⁴があり、音楽遊びと乳幼児の発達の関係性について検討がなされている。一方、高野（2012）は、一定の項目に基づき手遊びを踏まえた身体表現活動の母子間コミュニケーションについて観察研究をしており、母子間での動きの模倣がコミュニケーションの促進の要因となることを述べている⁵。

以上のことから本研究では、音楽を伴う表現遊びについて音楽的要素と母子間のコミュニケーションを促進する2点を踏まえた指標を作成し、その指標に基づき母子の表現遊びを分析し、表現あそび

B-⑤

の音楽的コミュニケーションについて考察する。

II 研究の方法

今回分析の対象者は A 大学附属幼稚園の未就園児親子クラブに所属している親子 25 組である。なお、本研究の協力については事前に研究の概要を説明し、そのうえで了解を得られている。

調査時期 2019 年 10 月から 2020 年 2 月のうちの 2 日間（いずれも午前中）

手続き 研究者の 1 人が対象とする親子に表現遊びの保育実践を行い、その実践内容を記録した。実施場所は、A 大学附属幼稚園の保育室、A 大学の図書館のフリースペースで行った。観察記録は、30 分程度で、研究者が紹介する表現遊びを見て、普段通り親子と一緒に楽しんでもらう様子をもう 1 人の研究者がビデオカメラで撮影録画した。

分析の方法は、ビデオ録画の親子の表現遊びについて、音楽的コミュニケーションの項目を設け、数名の分析者により検討する。音楽的コミュニケーションの項目については、筆者らの乳幼児の音楽的コミュニケーション概念に基づき、①音楽的要素、②音楽に対する身体反応、③他者との共同性 これら 3 つの大項目を基準に、数値化していく。

III. 研究の考察

今回の研究で実践した表現遊びには、互いに身体を触れ合うものや遊ぶ側が創作して考えて表現するものなど様々な種類の表現遊びで音楽的コミュニケーションについて分析を検討した。分析の結果、歌いかけながら親子が共に表現遊びをすることにより、身体の動作と歌のリズムとの同期が見られやすいことや身体を触れ合う遊びでない場合でも、子どもから親の身体に触れる遊びに変化させる表現の追加も見られた。このやりとはごく自然な親子の姿かもしれないが、歌を伴う表現遊びを、集団遊びの有効性や手法として考える視点ではない新たな音楽的コミュニケーションの見方として、今後も検討を進めたい。

引用文献

1. 今川恭子、市川恵、小佐川心子伊原小百合、志村洋子、「乳児と養育者の音声相互作用にみる音楽性—音響分析を通して見るその特徴と発達」、『聖心女子大学論叢』131、2018、114～128、
2. 矢部朋子「幼児の遊びにみられる音楽的表現の共有過程」、『保育学研究』49 (2)、2011、168～176
3. 古市久子「幼児の身体表現の特徴と手遊びの習得プロセス /3 歳までの事例を通して」、『エデュケア』26、2005、1～11
4. 小池美知子、安藤千秋「幼児の発達を促す年齢に応じた手遊び・からだ遊びの検討—既存の手遊び・からだ遊び及び保育現場の意識に着目して—」、『松山東雲女子大学人文科学部紀要』29、2020、31-41
5. 高野 牧子「身体表現活動による母子間コミュニケーションの変容」、『山梨県立大学人間福祉学部紀要』7、2012、1～16

参考文献

マロック・トレヴァーセン、『絆の音楽性—つながりの基盤を求めて—』音楽之友社、2018

コロナ禍における養成校のICTを活用したオンライン授業の効果と課題

佐藤 万利子 (聖和学園短期大学)

1. はじめに

厚生労働省より2020年1月16日に新型コロナウイルスが検出されたとの発表以後、国内での新型コロナウイルス感染が拡大し、3月に緊急事態宣言が発出された。全国の大学で授業が休講となり、授業再開後も新型コロナウイルス感染予防と拡大防止のためにオンライン授業が実施された。

2020年6月11日の中央教育審議会 初等中等教育分科会の「新しい時代の初等中等教育の在り方特別部会」では、「新型コロナウイルス感染症を踏まえた、初等中等教育におけるこれからの遠隔・オンライン教育等の在り方について」の中で、基本的な考え方と取り組みが示された。新型コロナウイルス感染症が収束しておらず、必要に応じて臨時休業等が行われる「WITH コロナ」の段階では、『ICTを活用しつつ教師による対面授業と遠隔・オンライン教育との組み合わせによる新しい教育様式を実践する』取り組みが必要と示された。さらに新型コロナウイルス感染症が収束した「ポストコロナ」の段階では、『対面授業の重要性、遠隔・オンライン教育等の実践で明らかになる成果や課題を踏まえ(中略)ICTを活用しつつ、対面授業や地域社会と連携した遠隔・オンライン教育を使いこなすことで協働的な学びを展開する』取り組みが示された。

新型コロナウイルス感染症が収束後も以前の対面授業のみに戻すのではなく、オンライン授業やハイブリット型授業を活用することが望まれており、ICTを活用したオンライン教育等の成果や課題を踏まえたカリキュラムマネジメントによる授業の検討が求められている。昨年度実施した本学の「ピアノⅠ」および「子どもと音楽(うた)」の対面授業とオンライン授業の振り返りを基に新しい時代の教育の在り方について検討したい。

2. 授業の取り組みと研究方法

本学では昨年前期開講が2週間延期になった。2020年前期授業が開始された当初は、課題提示⇒練習動画提出(返信)⇒コメントを学生へ返却する方法を実施した。

6月からは、課題提示⇒練習動画提出⇒学生へのコメント返信に加えて、インターネットを活用したリアルタイムで行う同時双方向型のオンライン授業と対面授業を併用することになった。事前に教員の演奏を撮影した「課題動画」と「課題の楽譜PDF」をGmailのクラスルームから配信し、学生は一週間自宅で練習した成果をスマートフォンやパソコンで撮影して「練習動画」をGmailのクラスルームへ返信する。学生から送られてきた「練習動画」を教員が視聴確認して諸注意等の講評コメントを返却し、さらに学生は次の授業まで同じ課題の練習を続けることを実施した。

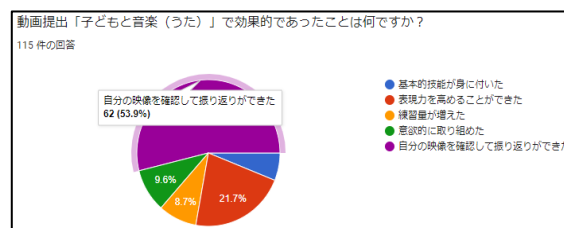
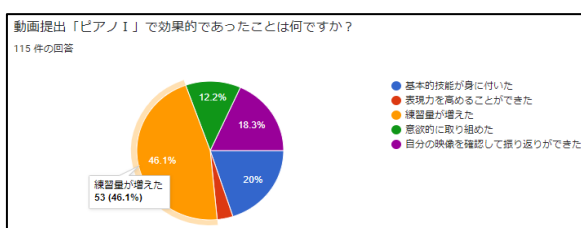
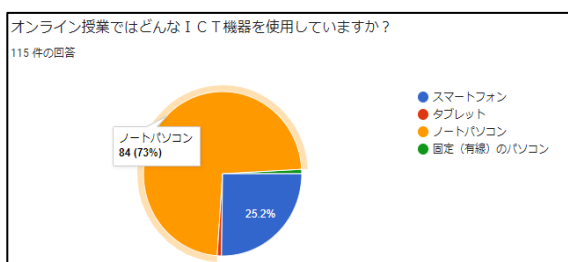
本研究では、「ピアノⅠ」「子どもと音楽(うた)」の授業を取り上げ、学生と非常勤講師へアンケートを実施した。「ピアノⅠ」は、担当教員が90分の授業で、4名の学生に対して20分ずつ個人指導を行う授業形態で実施している。「子どもと音楽(うた)」は『楽典』と『うた』の指導を45分ずつに分けて実施している。

C-①

- (1) 対象：保育学科1年生115名、非常勤講師13名
- (2) 実施時期：2021年2月、7月
- (3) 調査内容：①オンライン授業で使用しているICT機器の種類②動画撮影で使用しているICT機器の種類③「ピアノI」「子どもと音楽(うた)」の動画提出における効果④オンライン授業の感想⑤対面授業の感想⑤動画提出についての感想⑥インターネットの環境

3. 結果と考察

2021年度の1年生から、ノートパソコンを学生へ配布している。オンライン授業で使用しているICT機器は、ノートパソコンが最も多く73%、2番目はスマートフォンであった。動画撮影で使用しているICT機器では95.7%の学生がスマートフォンを使用していた。「ピアノI」の動画提出での効果について最も多いのは、「練習量が増えたこと」46.1%、次に「基本的技能が身に付いた」20%、「自分の映像を確認して振り返りが出来た」18.3%、「意欲的に取り組めた」12.2%の回答があった。「子どもと音楽(うた)」の動画提出での効果については、「自分の映像を確認して振り返りが出来た」53.9%、「表現力を高めることができた」21.7%の回答があった。オンライン授業の感想では、「オンデマンドの場合、わからない部分を何度も再生して確認し、後から授業を見直せるので、自主



学習に生かすことができる」「感染予防をせずに授業を受けられ、マスクを外し、安心して歌える」「周りを気にせずに自分一人で集中できる」の回答がある一方で、「電波が悪く上手く meet に入れないことや、画面がフリーズしてしまい、大事な連絡が聞こえない時がある」「時差が生じてしまうため、みんなで一緒に歌うことが難しい」との回答があり、「タイムラグ」の問題についての改善は難しいと思われる。動画課題の提出については、「ピアノの課題と、うたの課題が連携して繋がっているところが、自分の学びを深められて良い」「動画を取ることで改善点が見つけられるので、もう1回練習してみようと思ひ、練習量が増えた」「事前学習の時間が増えた」「練習動画の提示は表現の仕方が分かり練習する上でとても参考になる」との回答がみられ、自ら学び習得していることが分かった。新型コロナウイルス感染症の収束が不確かな現在において、引き続きICT活用により授業の検討、改善をして学生の意欲、音楽力を高めることが求められると思う。

小学校音楽科における歌唱指導の一環としての描画活動の有効性について

長島 礼 (関西学院大学)

1. はじめに

小学校2年生の音楽の授業では、題材「ようすを おもいうかべよう」の歌唱の分野において、「歌詞の表す情景や気持ちを感じ取って歌唱表現を工夫する」という活動がある。そこでは、「歌詞の表す情景や気持ち」に深くアプローチすることが学習のポイントとされており、学習方法としては、指導用のCDの範唱を聴いたり自分たちで歌ったりしながら、曲から感じ取ったり想像したことを話し合う機会をもち教師の板書によって全員で共有するという方法が提案されている。

筆者は、音楽専科の非常勤講師として私立小学校に勤務した際に、小学校2年生の児童にとって、言葉や文字で自分の気持ちを表現するということがまだまだ難しく、この学習方法を補完できるような活動を併せる必要性を感じた。そこで、歌について自分が考えたことや想像したことを描画で表現し、その描画をもとに自分の思いを発表する、という活動を併せることによって、「歌詞の表す情景や気持ち」により深くアプローチすることが可能になるのではないかと考えた。本研究は、実際の授業での試みを分析したものである。

2. 研究方法

実施日 : 2021年2月8日、9日、15日、16日の各々2、3、4時間目

対象児童 : 関西の私立S小学校に在籍する小学2年生(1組23名、2組22名、3組22名)合計67名

児童の様子 : 比較的豊かな家庭環境で育っている児童が多い。クラスによって多少の差はあるが、全体的に活発な児童が多く、どちらかというところ落ち着きのなさが目立つ。その一方で、躊躇することなく自分の意見を相手に伝えることができ、人前で発表することにも臆することなく挑戦する姿が見られる。

手続き :

研究期間の2021年2月初旬から中旬にかけては緊急事態宣言が発令されており、筆者が勤務した小学校では、学校の方針として歌唱活動をすることが難しい状況にあった。そのような状況の中で、1クラス2時間ずつ、以下の(1)から(6)の手順で授業を実施した。

- (1) 指導用CDにて「夕やけこやけ」の範唱を鑑賞する(1番と2番)。
- (2) 歌詞を朗読し、歌詞の内容について理解を深める。難しい語句の説明や、何が書かれているのか発言しあう。
- (3) もう1度範唱を聴き、1番と2番の歌詞について、気に入った方の歌詞を書き出す。また、特に気に入った部分の歌詞に線を引く。
- (4) 範唱を聴いて自分が考えたことや想像したことを絵で描く(1番の歌詞が気に入った児童は1番について、2番の歌詞が気に入った児童は2番の歌詞について絵を描く)。

C-②

- (5) 自分が描いた絵をもとに発表する。発表内容は、①何番の歌詞が気に入ったのか、特に気に入った歌詞はどの部分か、②その理由、③気に入った部分をどのように歌いたいか、の3点である。
- (6) 自分の描いた絵を見ながら、「夕やけこやけ」の範唱を鑑賞する。

3. 結果

3-1. 「夕やけこやけ」における子どもの描画と発表について

研究方法の手続き(5)にそって1人ずつ発表した結果、1番の歌詞を気に入った児童については、「①かねがなる②落ち着く③安らかな感じで歌いたい」、「①夕やけこやけで日がくれて②気持ちが温まる③優しくふわふわとした感じで歌いたい」等の発言があった。また、2番の歌詞を気に入った児童については、「①小鳥がゆめをみるところは②眠っている様子が良い③優しい気持ちで歌いたい」、「①子どもがかえったあとからは②早くご飯が食べられそうだから③うきうきした気持ちで歌いたい」等の発言があった。

3-2. 子どもの感想

本活動を全て終えた後に、(1)歌の範唱を聴いた後で、自分が考えたことや想像したことを絵で表現する活動は楽しかったですか、(2)自分が考えたことや想像したことを絵で表現したことによって、歌のことがよくわかるようになりましたか、の2点について、アンケート調査を行った。

その結果、(1)については約93%の児童が楽しかったと答えていることから、大半の児童が自分の思いを絵で表現するという活動を楽しんでいたことがわかる。また、(2)については、約72%の児童が「よくわかるようになった」と答えているものの、約28%は「かわらない」と回答していることから、活動内容に改善の余地が残された。

4. 考察

本研究では次の2点が明らかとなった。まず1点目は、自分が描いた絵をもとに発言することによって、自分の考えや感じたことを自分の中で整理することができ、また自分の気持ちや考えを他者と共有することができた。また、2点目は、一人ひとりの発表では、発表に対して様々な発言が飛び出し、「夕やけこやけ」の歌詞の枠にとどまらない、自分達ならではの想像の世界が展開される場面が見受けられた。そこでは、他者とのやり取りによって歌に対するイメージが広がり、それらを共有することによって自分たちの歌としての、歌への愛着を育む効果があると考えられる。筆者は、音楽科の授業と子どもの生活を区別するのではなく、音楽科の授業そのものを子ども達のものとして、その在り方を検討していく必要があると考えているが、この点においても効果があったのではないかと考えている。

参考文献

- 文部科学省『小学校学習指導要領 音楽編』東洋館出版社 2018
小原光一他『小学生の音楽2 教師用指導書 研究編』教育芸術社 2020

ⁱ 小原光一他『小学生の音楽2 教師用指導書 研究編』教育芸術社 2020 p.119

コロナ禍における校内放送（ピアノ・アレンジ BGM）の活用と授業実践

—小学校第1学年 共通教材《うみ》を中心として—

赤塚 太郎（東京福祉大学）

研究の背景

本発表は、コロナ禍による様々な制約の中で行われた、小山市立豊田北小学校（注1）（以下、本校）における校内放送（BGM）の活用と授業実践についての実践報告である。本研究は、本校長星野朋子氏が共同研究者として参加しているが、本学会においては非会員のため、筆者が代表して発表させて頂くことをはじめに付記する。

現在、コロナ禍における給食では、児童らは黙食を励行している。当初、放送委員の児童による給食の放送が中断され、共同研究者自らが放送を担当することになったが、既存の音楽のみを放送に使用するのではなく、様々なジャンルの音楽を提供し、食事の時間を少しでも楽しい有意義な時間に使いたい、という共同研究者の願いがあった。また、児童からリクエスト曲を募り、それらの曲を児童が意識的に聴く機会を提供したい、という共同研究者の思いを受け、筆者は唱歌、童謡、季節の歌等のピアノ・アレンジを録音し、その音源が放送に活用されるに至った（注2）。

研究の目的

本校の経営方針の1つである〈心の成長を実感できる活動・自分の思いを表出する活動をつづける〉ことと関連させ、以下の2点を主たる研究の目的とした。

1. 同一曲を異なったアレンジにしたり、音楽の授業の教材で扱う曲をピアノ・アレンジにしたりして、曲想や原曲との違い等、児童一人ひとりが感じたことを書き留めて、児童の表現力や感受性を養う（具体的な曲目は、表1. 登校時の音楽及び表2. 給食時の音楽に示したが、本発表では時間の関係から、第1学年 共通教材《うみ》を中心に発表する）。
2. 個々の1.における気づきを、《うみ》、第4及び6学年 教材《サウンド・オブ・ミュージック》、第6学年 共通教材《われは海の子》の歌唱・器楽表現に生かし、音楽活動を楽しみ、思いや意図をもった主体的・協働的な学習活動につなげる（注3）。

実践方法（単元：にっぽんのうた みんなのうた《うみ》）

給食時にピアノ・アレンジ BGM を放送し、第1学年の音楽の授業時に改めて2種類の《うみ》のピアノ・アレンジ音源を使用し、2時間扱いで授業を実施した（各時の目標（評価規準）は表3.）。

第1時では、曲調の違いや心に残った表現、感想等を児童が自由に発言した。第2時では、筆者がゲストティーチャーとして授業に参加し、児童が思う数種類の《うみ》に即興的にピアノ伴奏をつけ、児童の歌唱表現・音楽活動を支援する形を採った。なお、授業は校内公開授業として実施され、第2時の終盤では参観した教職員に向け、児童が《うみ》の歌唱を発表・披露した。

考察・まとめ

児童が記載したもの、参観者の教職員による感想、またゲストティーチャーとして参加した授業の様子から、以下の内容が考察され、本時の目標は達成されたと考える。

- ・児童は、音源から想像した海の場面・様子を自由に語り、歌唱の際にどのような海を表現してみたか、を自発的に示していた。

C-③

- ・児童が記載した振り返りで、《うみ》における様々な歌唱表現方法の面白さが感じられていたことから、児童の歌唱表現を支援したピアノ伴奏の役割は大きいといえる。
- ・昨年から放送してきた音源を、本年度の放送及び授業に活用したことは、限られた授業時間での授業内容を充実させる一手段となった。また、「聴く」という行為への主体性から、それをどのように表現してみたいか、という歌唱表現への主体性が培われる一要因となった。

表1. 登校時の音楽

2021年4月録音・放送 曲名(原曲の作詞、作曲者等)
《乙女の祈り》(T. バグジェフスカ作曲)
《子犬のワルツ》(F. ショパン作曲)
《サウンド・オブ・ミュージック》(O. ハーマースタイン2世作詞、R. ロジャース作曲)

表2. 給食時の音楽

2020年7月録音・放送 曲名(原曲の作詞、作曲者等)	2021年6月録音・放送 曲名(原曲の作詞、作曲者等)
《うみ》(林柳波作詞、井上武士作曲、文部省唱歌)	《うみ》(林柳波作詞、井上武士作曲、文部省唱歌)
《われは海の子》(文部省唱歌)	《われは海の子》(1)(文部省唱歌)
《にじ》(新沢としひこ作詞、中川ひろたか作曲)	《われは海の子》(2)(文部省唱歌)
《ひまわりの約束》(秦基博作詞・作曲)	《たなばたさま》(権藤はなよ作詞、林柳波補詞、下総皖一作曲)

表3. 《うみ》の各時間の目標（評価規準）

時数	目標（評価基準）
第1時	《うみ》の様々な演奏を聴いて、曲調に合わせて身体表現ができる。
第2時	歌詞や曲想、前時の《うみ》の様々な演奏を参考にして、自分の描いた海の様子を歌で表現できる。

注

(注1) 本校は2020年3月をもって閉校となり、近隣の小山市立豊田南小学校とともに、次年度以降、小山市立豊田中学校の小中一貫校として統合される予定である。本発表で学校名を公表するにあたり、共同研究者が研究参加者となる児童へその経緯を説明し、研究参加者のプライバシーを守ることに配慮した。また、本研究を行うにあたり、共同研究者がその趣旨を教職員に伝え、職員から同意を得た後に共通理解のもと研究を進めた。

(注2) 校内放送(BGM)を活用した本校の取り組みは、下野新聞の取材を受けて紙面で広く紹介された(2020年11月5日付)。また、本学会関東地区学会2020年度第3回研究会では、『コロナ禍における給食時の校内放送(BGM)を活用した、主体的・対話的で深い学びの実践～秋の曲(月・うさぎ・虫の声)のピアノ演奏と児童の交流～』を発表テーマに据え、演奏を交えて発表した。

(注3) 栃木県の新型コロナウイルス警戒度は、7月21日現在、県版ステージ2.5「厳重警戒」となっており、市町村立学校では、引き続き感染防止対策の徹底が呼びかけられている。本校は、児童数122名の小規模校・単学級であり、授業時は児童同士が近距離にならないように1メートル以上の間隔を空け、十分な空間を確保しながら音楽活動を展開している。また、全児童分の健康観察シートの記入及び提出(各家庭における毎日の検温及び健康観察)についても、教職員間で日々確認しながら、教育活動を行っている。

保育における身体表現活動の変遷に関する研究 (2) 意義と内容

門脇 早穂子 (茨城大学)

はじめに

本研究の目的は、明治期から戦後約 10 年までの保育における身体表現活動の変遷の中で、研究者たちがどのように繋がりお互いの思想に影響を及ぼしたのか、関連図から明らかにするものである。保育の身体表現活動に関する主な先行研究に、白川による日本におけるフレーベルのキンダーガルデン実践の導入に関する研究¹、長井(大沼)による倉橋惣三の唱歌・遊戯論²や土川五郎の遊戯論に関する研究³、名須川による戸倉ハルの唱歌遊戯・行進遊戯に関する研究⁴、谷村による京阪神聯合保育會を中心とした唱歌遊戯⁵が挙げられる。これらは、各々の研究者を中心に身体表現論が述べられているが、彼らがどのような関係にあり影響を受けているかについて全体像を示すものではない。そこで、明治期の遊戯から戦後のリズムに至る中で、フレーベルの遊戯を取り入れた研究者達の動向や影響の変遷を図式化(図1)し、身体表現の意義と内容を概観する。

1. 東京女子師範学校附属幼稚園の唱歌遊戯(明治期)

19世紀後半のアメリカでは、エリザベス・ピーボディによりフレーベル(独 Fröbel)の幼稚園運動が展開された。その後、スーザン・ブラウらの保守派とジョン・デューイやパティ・スミス・ヒルなどの恩物への固執に反対する進歩派の見解の相違により、フレーベル主義一辺倒から新しい保育へと変容する。その頃日本では、後に音楽取調掛となる伊沢修二(1851~1917)が、フレーベルの遊戯が子どもの活動性を養う上で必要と考え、1874(明治7)年に愛知師範学校長在職中に『蝶々』などの歌や遊戯を指導した。同時期に、東京女子師範学校の英語教師だった関信三(1843~1880)はイギリスに渡りフレーベル教育に出会う。帰国後、1876(明治9)年創設の東京女子師範学校附属幼稚園園長に就任した関は、フレーベルの集団遊戯を『幼稚園記』(1876-1877)内で紹介する。しかし伊沢によると、園での唱歌遊戯は古調の歌を古語で作られ子どもが楽しそうに遊戯をしていないとし、唱歌遊戯は子どもの心情に沿い子どもに適した言葉で、曲も簡単なものである必要性を説いている。1902(明治35)年、東京女子師範学校附属幼稚園批評係の東基吉(1872~1958)は、遊戯が教師主導のあて振りでは子どもの自主性を損ねると批判した。

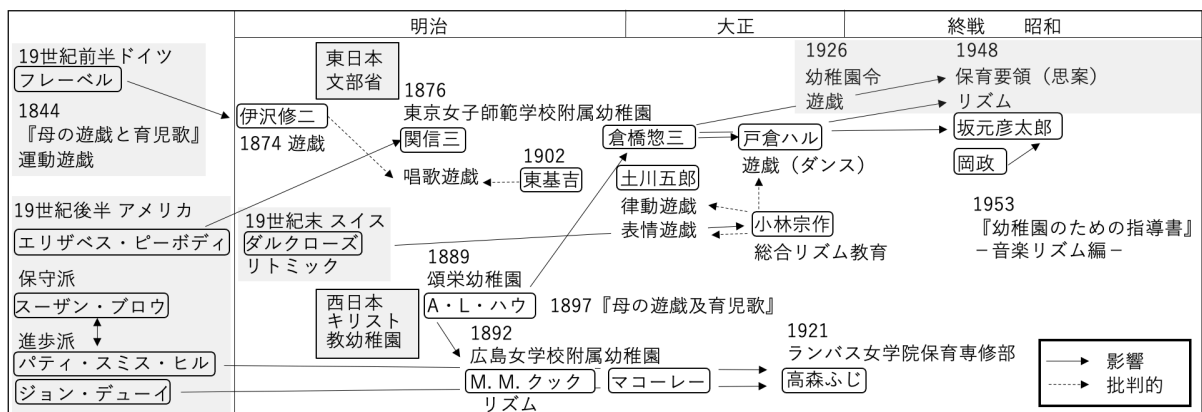


図1 明治期から戦後までの身体表現活動の動向や影響の変遷

C-④

2. キリスト教幼稚園の遊戯・リズム（明治期）

一方、西日本で展開されていたキリスト教幼稚園では、1889年（明治22）年に宣教師でフレーベル教育の研究者でもある進歩派のA・L・ハウ（1852～1943）により頌栄幼稚園が創設される。フレーベルの幼児教育思想と実践を忠実に実践したハウは、フレーベルの親子遊びなどの精神を損なわないよう挿絵を日本の生活や風俗に訳して表した『母の遊戯及育児歌』（1897）を出版した。一方、1892（明治25）年に創設された広島女学校附属幼稚園園長M. M. クックやマコーレーは、アメリカの進歩主義教育で学んだピアノに合わせて伸び伸びと行うスキップ等の身体活動を「リズム」として取り入れた。1921（大正10）年にランバス女学院保育専修部に移行後もデューイやヒルの教えを受けた高森ふじ（1877～1969）は、子どもが興味を持ちながら筋肉の統制や自己表現を行う、「リズム」の重要性と意義を保育を学ぶ学生に説く等、東西で独自の活動が行われていたことがわかる。

3. 児童中心主義の遊戯（大正期）

児童中心主義が進む大正時代に東京女子師範学校附属幼稚園主事であった倉橋惣三（1882～1955）は、自由に身体を動かすことは感情を表す上で唱歌以上に価値があると、見せるための遊戯を批判した。その考えはハウの保育に依拠する。東京女子高等師範学校で倉橋と同僚で幼児の遊戯（ダンス）を創作した戸倉ハル（1896～1968）も、子どもが既に持っているものを引き出す表現が大事と倉橋の考えに賛同している。フレーベル教育やリトミック等の影響を受け、遊戯の研究をしていた土川五郎（1871～1947）は、音楽に合わせた表現を律動遊戯、歌の感じを表現することを表情遊戯と分類している。また、ダルクローズ研究所に留学した小林宗作（1893～1963）は、振りのある遊戯に批判的で、リトミックを基礎とした自然リズムに基づく教育として総合リズム教育を創出した。

4. 保育内容「リズム」（戦後）

1926（大正15）年に制定された幼稚園令の廃止により、戦後の1948（昭和23）年に倉橋を中心とした保育要領（試案）が制定、保育内容12項目の中に「リズム」が示された。文部省初等教育課長であった坂元彦太郎（1904～1995）は、戸倉や岡山師範学校女子部附属幼稚園の岡政（1887～1975）の保育に影響を受け、大人が考えた遊戯からの脱却を図り中身を一新した「リズム」の改革を目指したが、現場での混乱を招いた。そこで保育要領制定から5年後に、文部省は『幼稚園のための指導書－音楽リズム編－』（1953）を出版し、系統性や計画性を持たせた内容を保育者に示した。

おわりに

明治期から戦後の身体表現における歴史を概観し、根本的にフレーベル教育が位置づけられながら研究者の考えや思いが影響し合う中で変化してきたことがわかった。また、子どもの実態に即し、振りの決まった遊戯から自由な表現ができる「リズム」へと変容する関連性が明らかになった。

参考文献

- 1 白川蓉子、『フレーベルのキンダーガルテン実践に関する研究』、風間書房、2014年、1～421
- 2 長井（大沼）覚子、「大正から昭和初期の倉橋惣三における唱歌・遊戯論」『白梅学園大学・短期大学紀要』50、白梅学園大学、2014年、1～16
- 3 大沼覚子、「土川五郎における「遊戯」論の展開とその歴史的意義」、『幼児教育史研究』2(0)、幼児教育史学会、2007年、15～30
- 4 名須川知子、「保育内容「表現」の史的変遷 昭和前期・戸倉ハルを中心に」、『兵庫教育大学研究紀要第1分冊 学校教育、幼児教育、生涯教育』20、兵庫教育大学、2000年、121～135
- 5 谷村宏子、「保育におけるリズム活動の意義 - 「遊戯」「リズム」を通して」、『全国音楽大学教育学会研究紀要』29、全国音楽大学教育学会、2018年、21～30

保育者養成における ICT を活用した表現教育の開発

駒 久美子 (千葉大学)

1. 研究の背景

平成 29 年 11 月、教職課程コアカリキュラムの在り方に関する検討会によって「教職課程カリキュラム」が示された。保育者養成課程においても、何をどのように学ばせるべきか、その指導の在り方にも工夫が求められている。筆者は、コアカリキュラムに示された「保育内容の指導法（情報機器及び教材の活用を含む）」の「情報機器及び教材の活用」に着目し、コロナ禍以前から新たな表現教育のひとつとして、ICT の活用を試みてきた。情報機器の活用にあたっては、幼稚園教育要領第 1 章総則、第 4 指導計画の作成と幼児理解に基づいた評価、3 指導計画の作成上の留意事項（6）幼児期は直接的な体験が重要であることを踏まえ、視聴覚教材やコンピュータなど情報機器を活用する際には、幼稚園生活では得難い体験を補完するなど、幼児の体験との関連を考慮すること¹、とあり、「幼稚園生活では得難い体験を補完」できるような幼稚園教諭としてのスキルや教材開発を検討すべく、以下のような研究発表を行ってきた。日本保育学会第 73 回大会では、オリジナルの映像作成と音楽制作の実践を通して、学生が工夫したことについて感想分析を試みた（注 1）。2020 年度前期はコロナ禍にあって全面メディアによるオンデマンド授業となり、その授業実践をもとに、日本乳幼児教育・保育者養成学会第 1 回大会では、幼児の感性を豊かにする「即興表現」を支える手だてを探るために、ICT を活用した即興表現の実践を報告し、その可能性について検討した（注 2）。さらに、日本保育学会第 74 回大会では、プロジェクションマッピング作品の制作過程における学生の意識の変容を明らかにし、メディア授業と対面授業によるハイブリッド化によってもたらされる効果と限界について検討した（注 3）。その結果メディア授業には、ひとりで繰り返し取り組むことができる反面、グループ活動では自分のペースで課題を実施できないもどかしさも見出された。そこで、本発表では、学生がひとりで取り組むことができつつ、学生同士が相互評価できるような作品づくりに焦点をあて、学生自身がこうした活動を体験することによって得られる学びを検討していきたい。

2. 研究の対象と方法

本発表では、全面メディアによるオンデマンド授業時に取り組んだ ICT による音楽づくりから、コマ撮り動画づくりへと発展させた実践を取り上げる。

【対象】保育内容（音楽表現）I 受講者 3 年 25 名 及び 幼児教育表現論（大学院）受講者 6 名

【期間】令和 2 年 6 月

【実践方法】オンデマンド授業として、Google が提供している Chrome Music Lab から、Song Maker を使って、簡単に繰り返しの音楽をつくる解説のあと、マスコットを動かして Stop Motion Studio でコマ撮り撮影した動画に、筆者が作成した音源を合わせて、コマ撮りのサンプル動画を作成する過程を紹介した。なお、音源制作にあたっては、全員 Song Maker を使用することとしたが、コマ撮りについては、Stop Motion Studio 以外でも使用可とした。実践後、自分で音楽や映像をつくってみて、こうした活動を子どもとどのように共有していけば良いか、Foam を利用し、学生による自由記述に

C-⑤

よって回答を得た。翌週には学生同士が出来上がった動画を鑑賞できるように、全員の作成した動画をひとつに繋いで配信し、それをまた鑑賞した感想を得た。

【分析方法】学生の作成した音源から、使用した音域、音色、拍子、小節数等、コマ撮り動画から被写体となる素材、演出等、Foam から学生の自由記述を分析対象とする。

3. 結果と考察

ここでは学生の自由記述の分析から、①実際に子どもと活動するならばどのように取り入れたいか、②実際にこうした情報機器を取り入れる際の配慮、の2点にまとめることができた。

表1 子どもと活動するならばどのように取り入れたいか

実際に子どもと活動するならば…
<ul style="list-style-type: none">・手拍子・足踏みなどの動作を入れた活動と組み合わせる・使用する音を決めそれを組み合わせる活動なら子どもにもできるのではないか・写真を繋ぎ合わせた映像に合わせて、リアル楽器を用いた音源制作の活動・様々な曲調やテンポの音楽を作り、保育室で流して子ども達はその音楽に合わせて自由に体を動かすなどの活動・保育者が自作した音楽を聞いてもらい、抽象画でも具象画でも、感じたままに紙に描くことで音楽単体ではなく他の活動と関連付ける・子どもが忍者のまねっこをしていたらそれを写真に撮っておいて、それを後で自分なりに作った効果音などを今回やってみたいに動画にしたらいいかではないか・Song makerを床に映し出して、音の動きと身体表現をリンクさせる・子どものつぶやきうたを聴き取って、保育者がつくる

表2 情報機器を取り入れる際の配慮

実際にこうした情報機器を取り入れる際には…
<ul style="list-style-type: none">・子どもが音楽に親しめるようなプロセスを大切に・情報機器を使用することでさらに創造性を高めたり、表現の幅を広げたり、新たな表現のしかたと出会ったりすることができるように活用していくことが大切・夢中になりすぎないように時間制限を決めることも大切・直接的体験が大事、だから「特別な活動」として日常の遊びとは違ったものとして扱う・使用できる音域・リズム・音色が固定化されており、制約内でいかに創造するか・子どもが主体的に活動することを念頭に受動的な取り組みにならない配慮・お便りなどでこのサイトのことを紹介し、保護者の方にも楽しめる音楽活動として扱うのも良いのではないか

今回の活動では、自分自身が音楽をつくることはそんなに難しくなかったけれど、実際に子ども自身が創作するのは、保育室内にタブレットなどの機器があるかどうかという問題もあり、難しいと考えている学生が多かった。そして、子どもが音楽そのものをつくるというより、保育者がつくってそれを保育に活用するのが良いと考えている学生が多かった。必ずしも子どもが実際に情報機器に触れなくても、子どもとともに情報機器を活用し、子どもの創造性、想像する力を引き出すひとつのツールとしての情報機器の活用を、今後も検討していきたい。なお、紙幅の都合上、音源と動画の実際、及び分析結果については当日発表としたい。

【注】

- 1 日本保育学会第73回大会発表論文集、駒・島田（2020）参照。
- 2 日本乳幼児教育・保育者養成学会第1回大会プログラム・要旨集、駒・島田（2020）参照。
- 3 日本保育学会第74回大会発表論文集、駒・島田（2021）参照。

【引用文献】

- 1 文部科学省、「幼稚園教育要領」、2018年

全国大学音楽教育学会 第36回全国大会《オンライン開催》

主催：全国大学音楽教育学会
主管：全国大学音楽教育学会関西地区学会

●実行委員会

実行委員長 (大会プログラム/ Web ページ編集担当)
山 岸 徹 (大阪キリスト教短期大学)
事務局 長 永 井 正 幸 (大阪青山大学)
実行委員 生 地 加 代 (武庫川女子大学)
岡 田 知 也 (香川大学)
奥 田 昌 代 (大阪信愛学院短期大学)
金 井 秋 彦 (大阪信愛学院短期大学)
衣 川 久美子 (幼保連携型認定こども園 神戸夢)
桐 山 由 香 (和歌山信愛大学)
中 尾 かつ江 (青山幼稚園)
丸 井 理 恵 (常磐会学園大学)
山 本 敬 子 (佛教大学)

●大会運営スタッフ

伊原木 幸 馬 (千里金蘭大学)
川 畑 尚 子 (大阪キリスト教短期大学)
作 野 理 恵 (大阪国際大学短期大学部)
迫 田 リツコ (大阪キリスト教短期大学)
篠 原 美 幸 (大阪教育大学)
谷 村 宏 子 (関西学院大学)
津 田 奈保子 (大阪芸術大学)
平 井 恭 子 (京都教育大学)
福 間 久 美 (関西女子短期大学)
藤 倉 智 文 (大阪成蹊短期大学)
藤 田 浩 恵 (兵庫大学短期大学部)
安 川 裕 子 (神戸女子短期大学)
山 岸 多 恵 (兵庫教育大学)
山 田 千 智 (大阪城南女子短期大学)
河 崎 雷 太 (技術支援/大阪キリスト教短期大学)

全国大学音楽教育学会 第36回全国大会《オンライン開催》プログラム Web 版

令和3年8月27日発行

発行所 全国大学音楽教育学会 第36回全国大会事務局
〒562-8580 大阪府箕面市新稲2-11-1
大阪青山大学 (永井 正幸)
E-mail m-nagai@osaka-aoyama.ac.jp
